お楽しみはこれからだ

――拙詠漢詩二十二首――

石川洋子

平成二（一九九〇）年四月に文学部国文学科専任講師として着任して以来、三〇年間を過ごし、このたび令和二（二〇二〇）年三月に退職することになりました。教職員の皆様、卒業生・学生の皆様、在職中は大変お世話になり、誠に有難うございました。

実は、同朋大学はたいへん居心地がよく、定年まできっちり務めるつもりでずっとおりました。ところが、私が五十九歳の年末、ふと、「もうこのくらいでいいかなあ」という思いが頭をもたげました。そのわけを考えてみると十指に余りますが、その内の少々を挙げれば、四年続けた人文学科の学科長の学務に疲れ果て、自分の体力に不安を感じたこと、念願の『論語』の訓読についての論文をまとめて、幸いに平成二十六年度の科研費を頂いて、出版でき安堵したこと、八十歳を越えて年老いた母に孝行するのは十年後では遅い、今しかないと思ったこと等です。

そこで、わがままな事ですが十年を残して、同朋大学を二年前に自己都合退職をいたしました。しかし、大学側

の諸事情で、特任教授として二年間の継続勤務を依頼されました。よって、このたびは二度目のそして完全な退職となりました。未熟なままに終わる凡夫ゆえ、静かに同朋を去ろうと考えていたのですが、学科長箕浦尚美先生の数度に亘る巧みなお奨めにより、つい、本稿を書くことになりました。

さて、何を書こうかと悩んでいるとき、フラッシュバックのように昔のことを思い出したのです。私が大学二年生から大学院一年生のときの自作の漢詩が「習作三首」、「習作五首」等と、母校の『実践国文学』（第十五・十七・十九・二十号）に掲載されました。漢詩作成をご指導頂いた今は亡き恩師、新田大作先生の批点付きです。思えば、初めての拙論掲載よりもだいぶん前の出来事です。そんなことを思い出し、退職に際しても、首尾一貫ということで（？）、本稿も自作の漢詩で締め括ろうと思い浮かびました。

新田先生は私が博士課程を満期退学し、母校の非常勤講師となった一年目に六十二歳という若さで亡くなりました。私は今年その年齢になりました。これも退職理由の一つです。先生亡き後、漢詩作成はおろそかになりました。ところが、実に不思議なご縁と言うべきか、十年程前、高松で開催された「偉大な高松の漢学者達」展の会場で後藤点の説明を依頼されて出席した折、新田先生のご友人と伺っていた石川忠久先生に、偶然お目に掛かりました。初対面でしたが、そのとき「二松詩文会」への入会をお誘い頂いたのです。

お言葉に甘えて入会し、忘れかけていた漢詩作成を二十年ぶりに再開しました。一首作成しては二松詩文会に投稿し、投稿した漢詩が採択されれば、批正されたものが『二松詩文』に掲載されます。この十年、「不采」となる場合もしばしばでしたが、掲載された拙詩は二十首になりました。そこで、この雌黄（しおう）二十首を本稿に載

せて頂こうと思い至ったわけです。

とは言っても、私は漢詩の素人、修行中の身ですので、実力不足で詩意が通じにくいこともあろうかと思います。また、漢詩を読み慣れていない方も多いと思います。そこで、二十首の拙詩をお示しする前に、恥ずかしながら、作ったときの事情、内容などの説明を少し加えることにいたします。

一首目「今春の桜」は、二松詩文会に入会して初めて作ったものです。

二首目「偶成」は、バブル崩壊・失われた二十年と言われた時期を詠んでみました。

三首目「春に逢ひて作有り」は、五十歳になった頃、能無き我が身の感慨です。

四首目「老親を思ふ」は、その頃健在だった離れて暮らす両親への思いを詠みました。

五首目「受験生新年を迎ふ」は、姪が大学受験生だったとき、年末年始にもかかわらず、一所懸命に受験勉強をしていた姿を詠んだものです。

六首目「大学入試中央試験の日降雪に感有り」は、大学センター入試で試験監督をしていたとき、受験生を見ての感慨です。この年は姪が受験生だったこともあり、例年以上に受験生への思いが深くなりました。

七首目「苦吟」は、これまで投稿した詩の「不采」が続き、何とか頑張って採択される詩を作ろうと、その苦労の様子を詠みました。

八首目「東日本大震災後一年」は、東日本大震災の一年後、淡々と咲き、淡々と散っていく桜を見て詠んだもの

です。

九首目「金環日蝕」は、珍しい金環日蝕を観ようと、戸外で大勢の人々と一緒に待っていると、曇っていた空が運良く晴れて、金環日蝕を観られた喜びを詠んだものです。

十首目「父の仙遊を哭す　其の一」、十一首目「其の二」は、父の死を悼んだものです。

十二首目「作詩」は、「不采」となった詩には、批正して下さった二松詩文会の先生（批正者はどなたかは知らされません）の批点が書かれて返却されます。それを拝見してどう修正したらいいか考えて、新たに投稿するのですけれども、いくら考えて直してもまだまだ自分の作が拙いことを身に染みて感じていると詠んだものです。

十三首目「母と与に亡父を懐ふ」は、夏休み帰省した折、一周忌の近い父を母と懐かしんだことを詠んだものです。

十四首目「苦境を自問す」は、十年ほど前、或る先生に博士論文をまとめることを勧められ、有り難いお言葉だと感謝しながら、その先生のご指導の下、数年をかけてまとめました。そしてそれを申請しましたが、審査の最終段階で「論文取り下げ」をした方がよいと言われる、私にとっては寝耳に水であり、理不尽だと思う事件がありました。そのときの心情を詠んだものです。この事件のストレスで、私の左耳は軽度難聴になりました。

十五首目「展墓して拙著刊行を報告す」は、博士論文に申請した論文を、同時期に科研費に申請していました。こちらはありがたいことに申請が通り、その助成金で拙著を出版することができました。捨てる神あれば拾う神ありです。早速、梅処（新田）先生のお墓をお参りし、刊行の報告をしたことを詠んだものです。お墓参りをした日

は、墓域にあるしだれ梅が満開で、梅処先生が梅の花の精に化し、刊行をお祝いして下さっているように思えました。そこを詠んだつもりで投稿したのですが、批正されたものは、私の意図したものとは別物になっており、自分の実力不足を思い知らされた一首です。

十六首目「退休の日　友人と中村公園に遊ぶ」は、二年前、同朋大学を退職した日、同じく退職した同僚のブレニナ・ユリア先生と桜満開の中村公園を訪ねたときの詠です。二人のこれからをお祝いしてくれるような今が盛りの満開の桜でした。

十七首目「華甲を迎へて作有り」は、還暦の年、退職をしたときの感慨を詠んだものです。

十八首目「緩和病棟に於て母氏の八十五歳を賀す」は、病室で八十五歳の誕生日を迎えた母のさらなる長寿を祈ったものです。母がステージ四の癌であることは、大学から退職が承認された後に分かりました。

十九首目「桜花を尋ねて慈母を懐ふ」は、母がもし今も元気でいたら、今年も一緒に桜を見ながら楽しく話をしているだろうにと、八十五歳の誕生日を迎えた同じ月に亡くなってしまった母を思い、込み上げてくるものがありました。

二十首目「七夕偶成」は、七夕の日、一年に一度の逢瀬の織り姫と彦星に、私たち夫婦を比較して詠んだものです。実は私、大学院の先輩の「お母様が元気なうちに結婚した方がよい」というアドバイスを受け、奇しくも母の亡くなる二ヶ月前に入籍し、柏谷（かしわだに）洋子となりました。先輩の言うとおり、母は大いに喜んでくれました。蛇足ですが、主人にはこの三十有余年の私の学究生活を蔭になり日向になり支えて頂いていることに心より

感謝しております。

次に、『二松詩文』に掲載された拙詩二十首を示します。この二十首は、『二松詩文』（二松詩文会編兼発行）の第三十三巻第四号（通巻百三十二号）、平成二十二（二〇一〇）年七月刊行から、第四十三巻第一号（通巻百六十九号）令和元（二〇一九）年十月刊行の間に掲載されたものです。

なお、二松詩文会には本稿への転載をお許し頂きました。

今春之櫻

風冷今春噤凍枝　耐寒櫻樹競妍遲
城邊就暖香纔散　未老萬紅撩亂披

今春の桜

風冷ややかに今春　噤凍の枝　寒に耐ふる桜樹　妍を競ふこと遅し
城辺暖に就いて香纔かに散じ　未だ老いざる万紅　撩乱として披く

偶成

醉中弄句幾詩篇　賞景重杯二十年
邦國昏迷緣底事　嘆吁延佇落下邊

偶成

酔中句を弄し幾詩篇　景を賞して杯を重ぬ二十年
邦国の昏迷　底事にか縁る　嘆吁し延佇す　落下の辺

逢春有作

人生五十竟何人　吾道無功始覺貧
不管四時窮達事　東風解凍又逢春

春に逢ひて作有り

人生五十竟に何人ぞ　吾が道 功無く始めて貧を覚ゆ
管せず四時は窮達の事　東風凍を解き又た春に逢ふ

思老親

雙親遠別幾經年　月下相思嘆逝川
遊子欲歸歸不得　無端俱老夜綿綿

老親を思ふ

双親遠く別れて幾たびか年を経たり　月下相ひ思ひて逝川を嘆く
遊子は帰らんと欲して帰り得ず　端無く倶に老いて夜綿々たり

受驗生迎新年

一刻千金百慮空　登龍努力有時通
家人刮目花消息　送舊迎新清苦中

受験生新年を迎ふ

一刻千金　百慮空し　登竜の努力は時有りて通ず
家人は刮目す花の消息　旧を送り新を迎ふ清苦の中

大學入試中央試驗之日降雪有感

學舍幽庭翻雪花　忽埋天地白無涯
一心走筆誰家子　爭識人生行路遐

大学入試中央試験の日降雪に感有り

学舎幽庭　雪花翻る　忽ち天地を埋めて白きこと涯り無し
一心に筆を走らすは誰が家の子ぞ　争(いか)でか識らむ　人生の行路遐かなるを

苦吟

尋芳吟歩句難工　弧坐題詩是亦窮
期日今宵論一刻　枯腸援筆五更中

東日本大震災後一年

香散紛紛蔭野塘　蹈花徐歩不妨狂
震災巨浪人迷徑　櫻樹無心發艶陽

金環日蝕（平成二十四年五月二十一日舊暦四月朔日）

蝕帶雲多心欲灰　今朝新月日邊開
城頭切切人皆待　見得金環舞袖回

哭父仙遊　其一

年年慈父喜兒歸　笑語溫顏曾不違
八十一齡乘鶴去　我心從是欲何依

苦吟

芳を尋ね吟歩　句　工なり難し　弧坐詩を題して是れも亦た窮す
期日は今宵　一刻を論ず　枯腸　筆を援く五更の中

東日本大震災後一年

香散じ紛々　野塘を蔭ふ　花を蹈み徐に歩む狂を妨げず
震災の巨浪　人　径に迷ふ　桜樹無心にして艶陽に発く

金環日蝕（平成二十四年五月二十一日旧暦四月朔日）

蝕帶雲多く心　灰ならんと欲す　今朝　新月　日辺に開く
城頭切々として人皆待つ　見得す金環　舞袖回る

父の仙遊を哭す　其の一

年々　慈父児の帰るを喜ぶ　笑語温顏　曽て違はず
八十一齡　鶴に乗じて去る　我が心是れより何れに依らんと欲す

其二

將棋菜圃一生俱　礦石収藏如寳珠
可恨溘焉天奪去　拈香憶父夜燈孤

作詩

回簡偏嗟不采時　熟觀批點索新詩
春宵到耳杏花雨　乘興吟哦拙自知

與母懷亡父

煩襟連日奈驕陽　今夏殘炎不可當
與母頻談慈父事　仙遊一歳涙成行

自問苦境

芳信不來心事違　五年努力氣方微
回頭昔日嘲人爵　青帝無情春色歸

其の二

将棋　菜圃　一生俱にす　鉱石の収蔵は宝珠の如し
恨むべし　溘焉として天奪ひ去る　拈香して父を憶へば夜燈孤なり

作詩

回簡偏に嗟く不采の時　批点を熟観し新詩を索む
春宵耳に到る杏花の雨　興に乗じて吟哦すれども拙自ら知る

母と与に亡父を懐ふ

煩襟連日　驕陽を奈んせん　今夏の残炎　当るべからず
母と与に頻りに談ず慈父の事　仙遊一歳　涙　行を成す

苦境を自問す

芳信来たらず心事違ふ　五年の努力　気　方に微かなり
頭を回らせば昔日　人爵を嘲る　青帝無情にして春色帰る

展墓而報告拙著刊行
梅處先生歸夜臺　森然塋域獨尋來
焚香欲告刊書事　追想音容涕淚催

展墓して拙著刊行を報告す
梅處先生　夜台に帰す　森然たる塋域　独り尋ね来る
香を焚き告げんと欲す刊書の事　音容を追想すれば涕涙催す

退休之日與友人遊中村公園
秀吉公園花盛開　放情談笑共徘徊
前途如祝芳香散　第二青春亦樂哉

退休の日　友人と中村公園に遊ぶ
秀吉の公園　花盛んに開く　情を放にして談笑共に徘徊す
前途を祝ふが如く芳香散ず　第二の青春も亦た楽しき哉

迎華甲有作
機心消去興縱横　華甲偏知四體輕
小院月昇移步看　從今吾道樂浮世

華甲を迎へて作有り
機心消え去り興は縱横なり　華甲偏に知る四体軽きを
小院月昇りて歩を移して看る　今より吾が道浮世を楽しまん

於緩和病棟賀母氏之八十五歳
枕席迎新笑語中　一心思子現神通
今朝獻壽事非夢　猶願延齡意不窮
〔注〕　誕日者一月二日也

緩和病棟に於て母氏の八十五歳を賀す
枕席新を迎ふ笑語中　一心に子を思ひ神通を現はす
今朝寿を献ず事夢に非ず　猶ほ延齡を願ひ意窮まらず
〔注〕　誕日は一月二日なり

尋櫻花懷慈母　　桜花を尋ねて慈母を懐ふ

一陣風吹花片飛　碧空芳景思依依　　一陣の風吹いて花片飛ぶ　碧空の芳景　思ひ依依たり

家慈含笑登天闕　獨看春輝涙滿衣　　家慈笑を含んで天闕に登る　独り春輝を看て　涙　衣に満つ

七夕偶成　　七夕偶成

老來爲侶繫孤蓬　携手相看笑語同　　老いて侶と為り孤蓬を繫ぐ　手を携へて相ひ看て笑語を同じくす

天上二星雖好在　銀河佳會又怱怱　　天上の二星は好在りと雖も　銀河の佳会は又た怱々たり

以上の二十首です。配列は、『二松詩文』に掲載された順番になっています。それは、詩を作成した順番でもあります。本稿に改めて拙詩をまとめてみて、この十年の間にもいろいろ有ったなぁと、記憶が走馬燈のようによみがえりました。

蓮如上人が五十九歳のときに書かれた「睡眠の御文」（『五帖御文』一帖目第六通）に、「このごろはなにとやらん、ことのほか睡眠におかされてねぶたく候は如何と案じ候へば、不審もなく、往生の死期も近づくかとおぼえ候」というお言葉があります。しかし、このお言葉を発した蓮如上人は、その後、八十五歳という天寿をみごとに全うされました。

私の寿命も神のみぞ知るで、いつ往生するか分かりませんが、昨年（二〇一八年）四月に頂きました「同朋大学

名誉教授」の称号に恥じないように、第二の青春ともいえるこれからの人生を送りたいと思っています。

◇　◇　◇

本稿の執筆終了後、石川忠久監修『新元号令和慶祝詩集』が令和元（二〇一九）年十二月に、また、『二松詩文』第四十三巻第二号（通巻百七十号）が令和二（二〇二〇）年一月に刊行され、そこに批正された拙詩がそれぞれ一首採択されましたので、ここに二首を追加いたします。よって、本稿の拙詩は全部で二十二首となりました。

『新元号令和慶祝詩集』の編集兼発行人は、二松學舍大学二松詩文会、斯文会聖社詩会、全日本漢詩連盟の三団体です。なお、こちらも二松詩文会に本稿への転載をお許し頂きました。

二十一首目「新元号令和を慶賀す」は、新元号「令和」を慶祝する詩です。「令和」の出典は『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首　并せて序」の序文です。「梅」は奈良時代に中国から渡来した植物でした。当時の日本には珍しくハイカラな「梅花」を題として、多くの英才が和歌を詠みました。この万葉の時代のように、令和の時代も新しいことに挑戦する英才が輩出し、よき時代にきっとなるでしょうと詠みました。

二十二首目「述懐」は、退職後も特任教授として継続勤務をしていましたが、これまでよりも郷里の母の元へ帰省する時間ができ、母との楽しい時間を持つことができました。しかしそれはたった一年だけでした。母は私の完

全な退職を待たずに逝ってしまいました。母のために退職したのに、人生とはままならないものだと改めて思い知らされました。

慶賀新元號令和

令日和風綺席開　座閒援筆共傾杯
題梅萬葉新方策　當代群英決踵來

新元号令和を慶賀す

令日和風　綺席開き　座間筆を援きて共に杯を傾く
梅に題するは万葉の新方策　当代の群英　踵を決して来たらむ

述懐

退休二歳覺身輕　來往家鄉話此生
開暦慈萱乘鶴去　不圖一別恨無情

述懐

退休二歳　身の軽きを覚ゆ　来往家郷　此の生を話す
開暦慈萱　鶴に乗じて去る　図らざる一別　無情を恨む